

日本茶を楽しむ日本人の習慣を残すには

渋谷教育学園渋谷高校 2年 柊元 沙羅

第1章 はじめに

近年、海外では緑茶がブームとなっており、“Green Tea”として人気を博している。しかし国内に目を転じてみれば、緑茶を含む日本茶の消費量は減少傾向にある。特に急須でお茶を飲む機会が減り、ペットボトルで飲む人を多く見かけるように思う。日本の伝統文化の一つである日本茶に、日本人があまり親しまなくなっているのではないかと思い、急須で飲む日本茶を国内でもっと普及させるにはどうすればいいのか考えた。

第2章 先行研究の分析

主に日本茶をめぐる現状を調べた。かつては急須で淹れて家庭で飲むものと認識されていた日本茶は、時が経つとともに変化していった。1985年に缶入り緑茶が、1990年にペットボトル緑茶が発売され、緑茶のティーバッグ、低カフェイン茶など様々な形で日本茶は飲まれている。しかし、人口減少や個食化、食事を作る時間の減少などにより、日本茶の消費量は減少している。飲料の簡便化が進んでいるが、急須で淹れた日本茶の方が栄養分をより多く含み、また、和食が世界遺産に登録されて日本茶にも注目が集まっていることで、日本の文化としてお茶を急須で飲む伝統的な習慣を残していくことは重要だと考えた。

第3章 研究の方法と対象

- 1.本校の生徒及び保護者に日本茶に関するアンケートを行い、実態を調べる。
- 2.茶葉の生産農家の方、日本茶を販売している大手企業にインタビューを行う。
- 3.日本茶関連で行われているイベントなどを調べる。

第4章 リサーチ・論証

まず、アンケート結果から、日本茶が好きな人は多いが、ペットボトルで飲む方が主流であることが分かった。

次に、日本茶飲料を生産している伊藤園などの企業に問い合わせた。伊藤園は茶葉とペットボトル茶、どちらも販売しているのだが、若者の日本茶離れを止めるために、お茶セミナーと呼ばれる食育活動や日本茶をもっと知ってもらうためのイベント、若者向けに改良した緑茶の販売などに取り組んでいた。

さらに、埼玉県狭山市の茶農家「宮野園」を訪ね、茶葉の生産に携わる農家の方のお話を聞くことができた。宮野園の経営者である宮野圭司さんによると、茶葉の生産がペットボトル飲料の生産に押され気味なのは事実だと言う。宮野さんはお茶のことや急須の

ことをもっと知ってもらうために、各地でのイベントや地元の小学校での体験授業を行っており、学校では子供たちが茶摘みや急須でお茶を入れる体験をして、日本茶に親しむ機会を作っているそうだ。

また、お茶の名産地である静岡の小学校では日本茶に関する様々な授業が行なわれていた。

第5章 結論

これまでリサーチをしてきて、急須で飲む日本茶をもっと普及させるには、人々の意識への働きかけが必要だということに気がついた。そのために何よりも人々に知ってもらうべきはお茶の知識である。茶所でのイベントなどすでに事例は多くあるが、これらは都市部に住んでいるとあまり身近ではない。これらの活動を全国的なレベルで押し広げるために一番有効な方法は、「学校での日本茶に関する教育」だと考えた。

私がこの研究を通して提案するのは「小学校での日本茶の体験授業」である。児童たちに日本茶の知識を伝えた後、実際に急須を使ってお茶を淹れてもらい、日本茶が日本人のおもてなしの心を表していることが感じられるような授業にする。この日本茶教育を全国的に行うことで、日本茶や急須に対する関心を高めることが目的である。

第6章 まとめ・今後の課題

小学校の初等教育は義務教育なので、この場を利用すれば子供たちは確実に日本茶に触れる機会を得ることができる。淹れたお茶を実際に飲んだりすることで、他の児童とコミュニケーションをとることもできる。自然と、お互いの感想や意見を交わすこともできる。また、日本茶を淹れて飲むことが楽しいと感じることで、進んでお茶を飲む姿勢を作ることができるはずだ。さらには、日本人らしいマナーも教えることができる。そして、この授業は日本文化を学ぶことにつながる。グローバル化が進む現代の社会で、自国の文化を学び、それを世界に発信することはとても大切なことである。特に日本茶は日常生活と密接に関わるものの一つなので、まずは日本人である私たちが日本茶について知っておく必要があるのだ。

最後に、この教育を展開する大きな狙いは、授業を受けた子供たちがそれをきっかけに家庭でも実践して欲しいということだ。この教育が、急須で日本茶を飲む習慣を残すことにつながることを期待される。